

生活科の研究について

嶋田 陽介

生活科が目指す「子供が学びをつくる姿」

詳しくは目指す子供の姿シートへ

これまでの2年間の研究を生かし、今年度の生活科では「子供が学びをつくる」姿を下記のように設定しました。また、この姿を実現するための支援を整理しました。

【課題設定】

子供の姿 身近な生活を自分との関わりで捉え、よりよい生活にむけて思いや願いを実現しようとする。

支援 子供が対象と繰り返し関わったり、対象との関わりについて思いや願いをもったりできるような場の設定を行う。

【課題追究】

子供の姿 具体的な活動や体験で得た気づきを友達と伝え合ったり、自分や友達の活動について振り返ったりしながら、対象との関わりを捉え直していこうとする。

支援 子供が自分の課題追究方法を選択できる場や、子供にとって必要感のある伝え合いの場を設定する。

【パフォーマンス】

子供の姿 追究の過程で得た気づきを今までの学習で身に付けてきた表現方法の中から適切と思われる方法を選択して表現する。また、追究の過程でよりよいものと考えたことを実践したり、活動の中での意欲や自信を表出したりしようとする。

支援 子供の気づきを関連付けることで課題解決の見通しをもたせるとともに、思考と表現が行き来できるような学習環境を設定する。

これまでの研究を通して、子供が自己をメタ認知する支援によって、子供たちが高いモチベーションを維持し、活動を調整したり目的に応じて選択したりして、主体的に学び続けることが明らかになりました。今年度の生活科では、子供が「対象への思いや願い」、「対象との関わり方」、「自分自身の成長」に能動的に関与し、調整していく「自己調整」に整理・焦点化して、研究を進めてきました。

生活科の研究実践における子供の「自己調整」

詳しくは実践指導案へ

生活科の研究実践「ぼくのわたしのあさがおさん」では、子供の「自己調整」の姿を下記のように構想し、授業実践に取り組みました。

	対象への思いや願い	対象との関わり方	自分自身の成長
自己調整の姿	あさがおへの思い 自分自身のあさがおに対する思いや取組から、「ぼくのわたしのあさがおさん」への視点をつくり出し、共有する。	あさがおの生長に向けて 追究やパフォーマンスの過程で、「ぼくのわたしのあさがおさん」の視点を踏まえながら、今後のかかわり方を検討・決定する。	思いや考えの変化、自分への気づき 自分のあさがおへの思いやかわり方の変化を自覚して、次へ生かそうとする。
	<ul style="list-style-type: none"> 大きく育てほしい！！ お世話を続けたい！ どんな花が咲くのかな？ 	<ul style="list-style-type: none"> 手紙を書いて知らせようかな？ もっとこうの方がいいかな？ 2年生に育て方を聞いてみたい！ 	<ul style="list-style-type: none"> あさがおさんといっしょに自分も大きく成長した！ 他の生き物も大きく育てられるかな？

生活科「ぼくのわたしのあさがおさん」研究実践について

研究実践においては、あさがおを自分の子供として大切に育てるよう促すことで、対象を通して自分を見つめ直し、自分自身の成長に気付くことができるような単元計画にしました。また、子供が無自覚な気づきを自覚化し、気づきの質を高めていくことができるよう、あさがおに変化が生じるタイミングで一人一人の思いや願いを全体共有したり、子供同士や教師、対象と対話を繰り返したりするように促しました(図1)。課題追究体験の過程で得た気づきや思い・願いは、『体験活動と表現活動

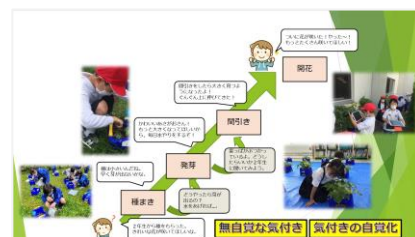


図1 気づきの質と活動の質の変化

が行きつ戻りつする相互作用』(須本良夫 (2018)) を意識できるよう、観察カードや手紙、話し合いなどの表現方法の中から適切と思われる方法を選択し表現する場を設けました(図2)。教師はその都度選択した理由を問い返したり、子供の気付きを即時的に価値付けしたりすることを繰り返すことで、子供の気付きの質が高まるよう支援しました。このように、子供たちは対象と日々向き合い対話することによって気付きの質を高めながら自己調整し、学びをつくっていきます。

気付きの表出



言葉や文字などに表出することによる気付きの自覚化
図2 気付きや思い・願いの選択と表現

子供の姿から

第10, 11時では、色水や押し花など、あさがおを用いた遊びに取り組む学習を行いました。振り返りでは、「きれいな花を咲かせてくれてありがとう。おかげできれいな押し花ができたよ。」「花を取ってしまっでごめんね。これからも水やりをがんばるね。」など、対象への愛着を深めることができました。また、休み時間や放課後には別の草花を用いて同様の遊びに取り組むなど、他の生き物にも関心をもって働きかける姿が見られました(図3)。



図3 あさがおとの遊び(表現活動)

第12時では、やがて枯れていくあさがおと“ずっといっしょにいるための方法”について話し合い、自分が納得できる方法を選択する学習を行いました。ある児童は3年生から『つるでリースを作ることができる』ということを知り、「自分もリースを作って部屋に飾りたい。そうすれば勉強しているときもずっと見守ってくれるから。」と発表しました。形が残るものを作るとすぐに思い出せることに気付き、リース作りに取り組みました(図4)。また、ある児童は「いっしょに記念写真を撮ってアルバムにすれば、いつでも思い出せると思う。」と振り返りカードに記入し、休み時間に何度も写真を撮りに向かうなど、気付きの質が高まった子供の姿を見ることができました(図5)。



図4 ずっといっしょ(リース作り)



図5 ずっといっしょ(記念写真)

研究から見えたこと

この3年間、生活科では、「子供が学びをつくる」ために、自分自身や友達、教師、そして対象との対話を繰り返すことで気付きの質を高めていくことができるような学習過程を大切にしました。『繰り返し動植物と関わることで、心を寄せ、生命を感じ、動植物の立場に立って考えることができるようになる』(久野(2017))と述べるように、対象への関心を絶やすことなく日々の活動と結び付けながら繰り返し学習を進めていくことが必要と考え、生活科の時間だけでなく朝の会や休み時間を活用しました。結果として、「今日のあさがおさんの様子」を伝える場が自然と生まれるなど、生活の一部として対象を捉えながら考えていく子供たちの姿を見ることができました。また、他教科・領域との合科的・関連的な指導を意図的に行うなど、十分な活動の時間や場の保障ができる授業を目指しました。様々な場面でじっくり対象と向き合うことで、世話を続けてきた自分自身の成長にも気付くことができたと考えます。「子供が学びをつくる」ためには、教師が子供の無自覚な気付きを自覚化させていくとともに、思いや願いを適切な方法で表出させていく必要があります。

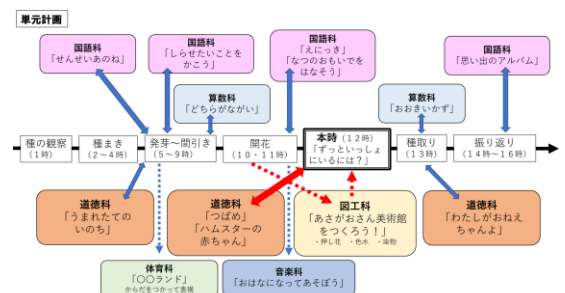


図6 単元計画の再構築に向けて

子供たち一人一人の気付きを関連付け、課題解決に向けた対話を繰り返しながら学びをつくっていくことができました。今後は、それぞれの思いや願いを子供同士で伝え合うことで協働的な活動の場を生み出したり、子供の気付きを適切な方法・タイミングで表出できるようカリキュラム・マネジメントを意識しながら単元計画を再構築(図6)したりするなど、子供一人一人がつくる学び、子供たち全員でつくる学びの充実を一層大切にしていきたいです。